法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

〈論文〉与謝野晶子の直感力とフランス女性観 ： フランスの雑誌・新聞を中心に

菊地，英之

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
104
(開始ページ / Start Page)
4
(終了ページ / End Page)
25
(発行年 / Year)
2021-08-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026056

〈論文〉

与謝野晶子の直感力とフランス女性観

――フランスの雑誌・新聞を中心に――

菊地　英之

一、はじめに

１９１２年5月、夫の遊学先であるパリに単身向かった歌人与謝野晶子。凡そ4カ月の滞欧中、晶子はフランスで複数のメディアに取り上げられた。晶子の寄稿を掲載した雑誌や、現地新聞に掲載されたインタビュー記事、又、その内容への反論記事などを検証することで、晶子のフランス女性観と異文化に対する理解度、更にはその創作に於ける傾向が浮かび上がってきた。以下その考察を試みる。

尚、晶子のフランスメディア露出に重要な役割を果たしたフランス人ジャーナリストが後年、晶子のパリ滞在に関し、あるエピソードを回想した未発表原稿、及び晶子が表紙を飾った雑誌に使用された写真のオリジナル等、新発見を含む数点の写真が見つかったので併せて紹介する。

二、晶子を紹介したフランスの雑誌・新聞

半年に満たないフランス滞在期間中、晶子は当代一の日本女流詩人として、複数のフランスの雑誌・新聞に紹介された。以下、時系列で晶子を取り上げたメディアを列挙する。

①雑誌『ル・ミロワール』“Le Miroir”１９１２年8月25日　日曜版22号。

②日刊紙『ル・タン』“Le Temps”１９１２年9月12日　１８６９８号

③日刊紙『ル・プチ・パリジャン』“Le Petit Parisien”１９１２年9月16日　１３１０６号

④週刊誌『レ・ザナル ポリティック・エ・リテレール』“Les Annales politiques et littéraires” 1912年9月29日 1527号（以下、『レ・ザナル』と略）

（＊『ル・タン』紙の転載記事ではあるが晶子離仏後の1913年4月10日付の月刊誌『ドゥマン』“Demain”そして4月16日には更にその『ドゥマン』誌を引用した一文が『ル・ラディカル』“Le Radical”紙に掲載されている。）

三、『レ・ザナル』誌について

晶子を紹介したフランスの出版物で最も知られているのは、着物姿の晶子が表紙を飾った文芸誌『レ・ザナル』である。記事は以下の様に3部構成、写真、イラストを含む5ページに渡る本格的な晶子特集となっており、彼の地で晶子を紹介した記事の中では最も充実したものである。

(1)編集部による序文に続き、レオン・ファロー（Léon Faraut）による詳細な晶子のバイオグラフィーと日本に於ける詩歌の伝統、皇室と歌の関係等について。

(2)晶子による「仏蘭西（フランス）に於ける第一印象」（Premières impressions sur la France）

(3)1912年9月13日、明治天皇の大喪の礼に際し、夫人と共に殉死した乃木希典大将の詩歌を紹介。

(2)については、日本帰国後、寛と共著で出版したヨーロッパ紀行集ともいうべき『巴里より』に、「巴里（パリイ）に於ける第一印象」という1章を設け、題名を「仏蘭西」から「巴里（パリイ）」に改め再録している。章の冒頭、「これは自分が巴里（パリイ）の文芸雑誌「レザンナアル」の記者の望みに応じて書いた所感の一部」（＊傍点筆者）との注が付される。[1]

実際に原文のフランス語と「巴里（パリイ）に於ける第一印象」を突き合わせ比較すると、文の構成、語法、数字の違いなどが散見される他、一方に見られ、他方にはない記述、又、その逆のケースも認められる。一つには、翻訳上の問題が大きく影響していると思われるが、晶子が「所感の一部」と記したように『巴里より』再録の際、自ら手を加えた部分もあるようだ。両者の詳細な比較検討は有益であろうが、今回のテーマからは逸脱するため、その研究は別な機会に譲る。

四、晶子、寛パリでの写真

今回入手した9葉の写真について触れる。3葉が『レ・ザナル』誌掲載用に撮影されたもので、寸法は155㎜×105㎜。

他6葉はパリの室内で撮影された既知のものであるが、それが与謝野夫妻の居住したモンマルトルのアパルトマン内であったかは不明である。

以下、便宜上、前者3葉を「A組」、後者6葉を「B組」

写真３　Ａ組写真　晶子着座姿勢の『レ・ザナル』誌未掲載カット

写真２　Ａ組写真　『レ・ザナル』誌の表紙を飾った晶子写真のオリジナル。

写真１　Ｂ組写真　パリのアパルトマン室内でテーブルを挟み座る晶子と寛

と呼ぶ。

Ｂ組、晶子単身の立ち姿と着座姿勢、及び寛が単独で写った３葉がやや小型の１２０㎜×９０㎜。他３葉は約１８０㎜×１２５㎜で、１葉はテーブルを挟み、晶子と寛がポーズを取ったもの（写真１）、残りの２葉は晶子立ち姿と寛の小型写真を引き伸ばしたものである。

Ａ組の２葉は晶子が単身で写る。椅子の背凭れに手を掛け正面を向く立ち姿（写真２）とやや斜めを向いた着座姿勢のもので、後者は雑誌未掲載のカットである（写真３）。

他１葉は椅子に腰掛けた晶子を中央に、向かって左手に寛、右手には与謝野夫妻の通訳を務めた画家、江内春潮と３人で写る（写真４）。

寛と江内の腕に喪章が見られるのは、写真が明治天皇の崩御１９１２年７月30日以降の撮影であることを示す（写真５）。

Ａ組、晶子立ち姿の上半

写真４　Ａ組写真　与謝野夫妻と通訳を務めた画家江内春潮。『レ・ザナル』誌掲載写真のオリジナル。

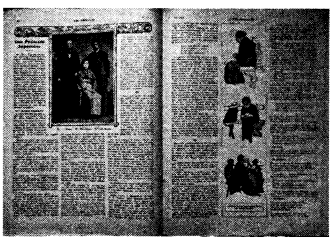


写真５　『レ・ザナル』誌に掲載された写真と江内春潮によるクロッキー

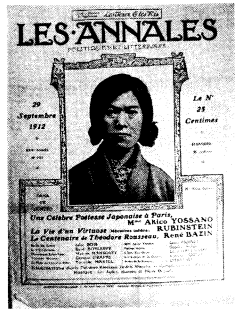


写真６　晶子を特集した『レ・ザナル』誌表紙。

身部分を拡大、若干の修正を施したものが『レ・ザナル』誌の表紙を飾る（写真６）。

これらA組の３葉は晶子の渡欧１００年を経て、今回、初めて見つかったものである。

晶子の着物に着目すれば、B組のものがおそらく、『巴里より』に「秋草（あきくさ）を染めたお納戸（なんど）の絽（ろ）の着物」と描写されたそれで、ロダン訪問時に着用していたものであろう。晶子は渡仏に際し、三越で特別に着物を誂えたことが知られるが、A組写真に見られるものは、それとは異なる雛菊柄である。

晶子の髪型に目を向ければ、A組のものは、『巴里より』に実体験を交え記したように、分けた髪の毛先を左右で巻き上げ、当時の流行を取り入れていたことが窺える。B組では髪を左右に大きく張り出し纏めている。外出時、好んで被ったという庇の大きな帽を戴くのに適した形に整えたものであろうか。いずれもパリの流行に対する晶子の関心の高さが現われている。

五、『ル・ミロワール』誌

『レ・ザナル』誌に先立つこと約１ヶ月、与謝野夫妻のパリ滞在を写真入りで報じた雑誌、『ル・ミロワール』誌がある。晶子を初めてフランスに紹介した現地媒体である（写真７）。

写真７　与謝野夫妻の記事が掲載された『ル・ミロワール』誌表紙。

晶子がパリからこの雑誌を明星派の歌人、新詩社同人でもあった菅沼宗四郎宛に郵送をしていたことが『鉄幹と晶子』に記され、原本は当時日本に一冊だけ送られた貴重な一部であったという。[2]

『ル・ミロワール』誌、その由来は、１９１２年４月１日より『ル・プチ・パリジャン・イリュストレ文芸版増刊号』“Supplément littéraire illustré du Petit Parisien”（以下、『プチ・パリジャン増刊号』と略）を引き継ぐ形でスタートした週刊誌である。同年３月24日付けの『プチ・パリジャン増刊号』では、近日模様替えとなる『ル・ミロワール』誌の宣伝が表紙を飾り、裏面には「現代のイラスト入り雑誌に於けるあらゆる改良が施され、その成功は今日か

写真8　『ル・ミロワール』誌の創刊を予告する『プチ・パリジャン増刊号』紙表紙

写真9　『ル・ミロワール』誌に掲載された与謝野夫妻の写真と記事

写真10　B組写真　『ル・ミロワール』誌掲載の晶子オリジナル写真。

ら既に保証される」との広告が半ページを占める[3]（写真8）。

与謝野夫妻の記事が掲載されたのは創刊から22号目（写真9）、使用された晶子、寛のポートレート写真のオリジナルは、B組の中に含まれる（写真10～12）。雑誌掲載の写真はトリミングが施されているが、オリジナルの写真では寛の腕に喪章が確認でき、撮影の時期はA組同様、明治帝崩御以降であったことが分かる。

B組に含まれる小判写真3葉の裏面には「ル・プチ・パリジャン、複製禁止、ネガ、L. ロベール」（Le "Petit Parisien" Reproduction interdite, Cliché: L. Robert）の押印が認められ、これらがプレス用として撮影、使用されたものであることを示す。

六、レオン・ファローと『ル・ミロワール』誌を繋ぐル・プチ・パリジャン社

パリ滞在中の与謝野夫妻と親交を結んだレオン・ファロー、晶子に拠れば『ル・プチ・パリジャン』紙の記者であったという[4]。

ファローが『レ・ザナル』誌に寄せた記事と『ル・ミロワール』誌の間には複数の共通点が見られる。以下、主な

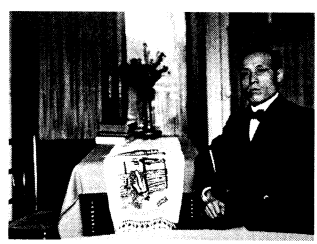


写真11　B組写真　『ル・ミロワール』誌掲載寛ポートレート写真のオリジナル。

写真12　B組写真　晶子立ち姿の別カット

点を列挙する。

1：晶子が日本で当代一の詩人と認められていることを伝え、それを“unanimes”“à l'unanimité”（全員一致、満票で）の語を以って紹介。

2：日本の詩歌が非常に古い歴史を持つことに触れる。

3：晶子と寛との恋物語について。

4：寛との結婚以前、晶子が何人もの男性から求婚されていたとの指摘。

5：『明星』への詩歌投稿とそれを通じた寛との出会い。

6：『明星』の主幹、寛が投稿された晶子の詩を非常に高く評価し、自らその第1席に推したこと。

7：新体詩が日本でこの20年来の新しいジャンルであると紹介。

8：日本の詩をフランスのソネット（14行定型詩）を引いて説明。

9：『毒草』『春泥集』等、晶子の詩集の名を引き、更に、随筆『一隅より』を紹介し晶子のフェミニストとしての一面に触れる。

細部で若干ニュアンスの異なる部分も認められるが、“unanimes”“à l'unanimité”や“sonnet”といった語を用い、新体詩が20年来のものであると具体的な年数を挙げ、更に両誌共、晶子の詩人としての活動に留まらず、初の評論集『一隅より』を引き彼女のフェミニストとしての一面に触れているのは単なる偶然ではないだろう。

『ル・ミロワール』誌の前身が『プチ・パリジャン増刊号』であり、B組写真3葉の裏面に「ル・プチ・パリジャン」の刻印があることは、同社記者であったというファローの介在を示唆する有力な傍証の一つといえよう（写真13）。

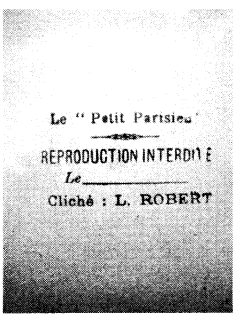


写真13　B組写真「プチ・パリジャン」の刻印がある裏面。日付を記す欄もあるが、記載はない。しかし、寛の喪章からB組写真の撮影時期は1912年7月30日以降、『ル・ミロワール』誌発売の同年8月25日以前である。

してみると、『ル・ミロワール』誌の無署名記事もファローの筆によるものであった可能性が高く、レオン・ファローが晶子のフランスメディア露出に果たした貢献度は極めて大きかった。

七、レオン・ファローの仲介

今回、晶子の寄稿した『レ・ザナル』誌に関するあるエピソードをレオン・ファローが後年回想した、A4サイズの青い紙にタイプ打ちされた未発表の原稿4枚が見つかった（写真14～17）。

原稿に拠れば、ファローは1912年当時、日仏協会の一員で、日本大使館との友好的関係から、各方面の著名日

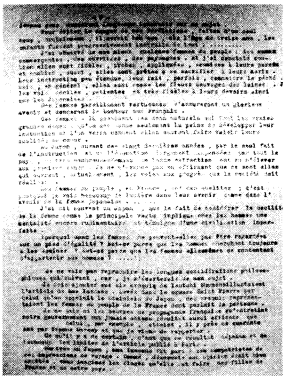


写真16　レオン・ファローによる未発表原稿3

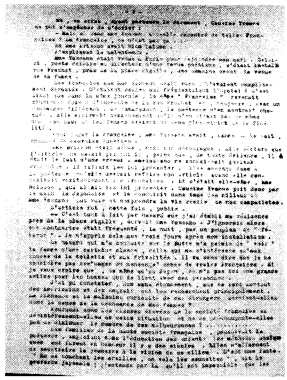


写真15　レオン・ファローによる未発表原稿2

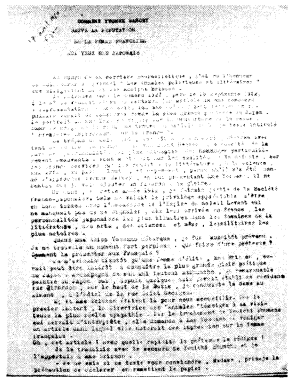


写真14 レオン・ファローによる未発表原稿1

本人が来仏する際は必ず連絡を受け、晶子のパリ到着についても速やかに知らされていたという。日本詩壇で最も名高い女流歌人と面識を持つことを喜んでくれるであろう、レ・ザナル社主筆の一人、ブリッソン夫人へは彼が仲介の労を取った。ファローの友人でモンマルトルにアトリエを構える日本人画家、江内春潮を通訳として伴い、寛と着物姿の晶子でレ・ザナル社を訪問。非常な好意を示したブリッソン夫人＝イヴォンヌ・サルセイ（Yvonne Sarcey 1869―1950）[5]はその場で晶子にフランス女性の印象について記事を書くよう依頼をしたという（写真18）。

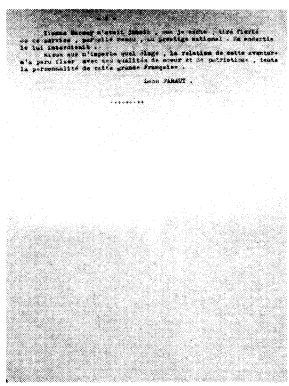


写真17　レオン・ファローによる未発表原稿4

写真18　晶子に原稿依頼をしたレ・ザナル社のブリッソン夫人（イヴォンヌ・サルセイ）24歳頃の肖像。晶子をレ・ザナル社に迎えた1912年当時は43歳。写真右は父、劇評家のフランシスク・サルセイ。中央は『レ・ザナル』誌を創刊者したジュル・ブリッソン。左はジュルの子息でイヴォンヌの夫、アドルフ・ブリッソン。掲載写真は雑誌「ル・テアトル」“Le Théatre” 1899年5月号　付録冊子17　アンドレ＝マルセル・バシェ“André-Marcel Baschet”の油彩画「アドルフ・ブリッソン夫人邸に於ける家族の集い」“Réunion de famille chez madame Adolphe Brisson”（1893年）に拠る。

八、モンマルトルの日本人画家、江内春潮

レオン・ファローの友人で与謝野夫妻のレ・ザナル社訪問に同行した画家、江内春潮について記す。

晶子が表紙を飾る『レ・ザナル』誌には、「日本の若い才能あふれる画家」と紹介され、モンマルトルでのクロッキー6点が掲載（内3点は写真5参照）されている。黒猫のポスターで知られる当時の流行画家、テオフィル・アレクサンドル＝スタンラン（1859～1923）になぞらえ、ファローは江内を「真の和製スタンラン」と称した。[6]

雑誌に綴られた名は“Yeutchi Shuncho”。“Yeutchi”が「江内」であることは『巴里より』の一章に与謝野夫妻が「画家の江内」と「暗殺のキャバレエ」へ出掛けた記述から知ることが出来る。しかし、“Shuncho”の漢字表記、またその人物の詳細については不明であった。

その名を見つけたのは、7点のデッサンと顔写真入りの記事が1面を飾る1911年7月21日付け（1390号）、フランスの新聞『コメディア』紙“Comœdia”である。また、1912年パリのオデオン座で上演された「日本の誉れ」(L'honneur Japonais) という忠臣蔵をフランス風に翻案した劇の成功を伝える『日仏協会会報』第30号（1913年7月）[7]には江内による劇中人物等のデッサンが紹介され、続く『会報』31・32合併号（1913年10月―1914年1月）では彼が印象派に倣った「ジャンティ市郊外の一角」(Un Coin de Banlieue à Gentilly) という作品で1913年のサロン・ドートンヌ（Salon d'Automne）に入選、批評家から高い評価を受けたことがファローにより報告され、「才能あふれる画家」という紹介が強ち誇張でない実力を有していたことが分かる。[8]

以下、コメディア紙を中心に江内について紹介する。しかし、その経歴は本人が記者に語ったもので、事実確認が必要な点もある。

“Shuncho”の漢字表記は「春潮」。本人が記者に名の意味を「春の海」(Mer de printemps, Mer＝海、Printemps＝春）と説明し、“Shun”は「春」、“cho”はその音と共に海に繋がる「潮」であろう。紙面に紹介された作品の落款印からも「春潮」の号が確認できる。

3年の学業を首席で終えた後、国立美術学校の優等生しか入門を認められなかった岡倉天心のアカデミーに3年学ぶ。[9]腕の確かさと速さは驚異的で、最も優秀な学友がデッサン1点を仕上げる間、彼は10枚を書き上げたエピソードが伝えられる。[10]又、韓国王が日本政府にソウル王宮の装飾を任せる有能な日本人画家の斡旋を依頼した際、天皇の指名で江内に白羽の矢が立ったという。[11]

2年に渡りヨーロッパの大都市、及びその主要美術館を巡り、1910年よりパリ滞在。Mr. Humbert（Ferdinand Humbert 1842～1934）に師事し油絵を研究。当時、

江内は25歳であった。

渡欧以前に美術を学んだのは「京都や東京の学校」[12]とあることから、江内が最初に進んだ美術学校は京都周辺と見当が付く。当時、該当するのは、日本最古の美術学校、京都府画学校（１８８０年開校　現・京都市立芸術大学）のみで、京都市立美術工芸学校と改称されていた１９０６年当時の卒業制作者名簿11名の中に「鷲」図を提出した江内春潮の名が見える。[13]

江内のフランス語能力について、日常会話、芸術上の意見交換は十分可能なレベルに達していたことを伝えるが、文法や発音に関しては飽くまで滞仏約1年に見合う「愛すべき拙さ」（délicieusement mal）を備えたものであったようだ。

彼のアトリエは、ファローに拠ればギラルドン通り（Rue Girardon）[14]、コメディア紙は「ルピック通り（Rue Lepic）頂上の高所」[15]と異なって伝えるが、両者はモンマルトルの丘上部で交わり、その角には風車が聳える。ルノワールの絵画で知られる「ムーラン・ドゥ・ラ・ギャレット」跡である。１９１１年の日仏協会名簿に江内の名が見られ、肩書は「東京美術学校教授」、その住所は「ルピック通り55番地」と明記される。[16]ギラルドン通りと交差する手前、丘の中腹である。

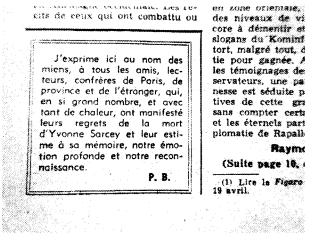
一夜、与謝野夫妻を伴い訪れた「暗殺のキャバレエ」、別名「オ・ラパン・アジル」はアトリエから徒歩圏内である。多くの画家や詩人が集ったこの著名キャバレーの名物主人、フレデ親父に請われ、江内は来店記念帖に数点のデッサンを手早く描き、「モンマルトルの日本人画家」と署名したことを伝える記事が１９１３年11月30日付『ラントランシジャン』紙“L'Intransigeant”に掲載されている。この年のサロン・ドートンヌ入選を祝しての依頼であったろう。（＊追記参照）

九、ファローによる１９５０年の原稿

１９５０年、ファローがタイプした原稿には「いかにしてイヴォンヌ・サルセイが日本人の目から見たフランス女性の評判を救ったか」とのタイトルが冠され、その左脇に、“19 avril 1950 Figaro”の手書きメモが添えられる。[17]

38年を経て、再び晶子のパリ滞在に触れたこの一文は、同年4月14日に逝去したレ・ザナル社主幹、イヴォンヌ・サルセイに関する世に知らざれる功績として、日本の女流歌人との交流から生まれたあるエピソードを追悼文として捧げるため草されたものであった。『ル・フィガロ』紙に宛てたのはサルセイの息、ピエール・ブリッソンが当時その主筆を務めていたことによる。

この原稿の紙面掲載を確認すべく、「１９５０年4月19日」を手掛かりに『ル・フィガロ』紙、更により文芸色の濃い週刊紙、『ル・フィガロ・リテレール』“Le Figaro


J'exprime ici au nom des miens, à tous les amis, lecteurs, confrères de Paris, de province et de l'étranger, qui, en si grand nombre, et avec tant de chaleur, ont manifesté leurs regrets de la mort d'Yvonne Sarcey et leur estime à sa mémoire, notre émotion profonde et notre reconnaissance.

P. B.

写真19　『ル・フィガロ』紙掲載。1950年4月20日付1745号P. B.（ピエール・ブリッソン）署名記事。

Littéraire”にも当たったが、サルセイ追悼特集の中にファローの名を見つけることは出来なかった。しかし、4月20日付け『ル・フィガロ』紙にP. B.（ピエール・ブリッソン）の署名で以下の一文があり、ファローの投稿が多数の追悼文に埋もれ未掲載となった事情が察せられる（写真19）。

「イヴォンヌ・サルセイ逝去に際しパリ、地方そして海外の友人、読者、同業者から非常に多くの温かい哀悼の意を寄せて頂き、生前の御交誼に対し家族一同、皆様へ衷心より深い感謝を申し上げる」[18]。

ファローの原稿には、与謝野夫妻パリ滞在先の正確な住所や寛がモンマルトルに越した時期に若干の事実誤認[19]が認められるものの、主題となる晶子パリ滞在時のエピソードは極めて興味深い未知の情報である。又、紙面に掲載されず、活字として残らなかったが故、今回発見したこの原稿が当時のある出来事を伝えるユニークな資料として貴重である。以下、その内容を要約する。

レ・ザナル社でサルセイよりフランス女性についての印象を書くよう依頼された晶子は、驚くべき速さでその記事を書き上げた[20]。友人、江内の助けを借りフランス語に訳した原稿をサルセイに手渡す際、ファローは「これがお気に召すかわかりませんが……」と注意を促さなければならなかった。何故なら、晶子が素早く書き上げた原稿には、パリ到着のその日から目に触れたであろう下宿界隈の女達、日に何度も異なる男性をアパルトマンへ誘い（いざな）春を鬻（ひさ）ぐモンマルトルの女を一般のフランス女性と誤って観察した記事が書かれていたからである。そうした女性達を目の当たりに、ショックを受けた晶子は「女性の貞操観念のより厳格な日本ではこのようなことはない、ときっぱり断言した」のである[21]。イヴォンヌ・サルセイが「どこで与謝野女史はこうした女性たちに出会ったのか？」[22]と驚倒したのは当然で、晶子の誤った観察に拠る「仏蘭西（フランス）に於ける第一印象」第1稿はサルセイの判断で発表が見送られた。

サルセイはその初稿に落胆こそしたが、日本随一の女流歌人にフランス女性の印象を語らせる意欲を失うことなく、自ら晶子を各階級のフランス婦人に引き合わせる労を執り、再度の原稿依頼をしたという。

1912年9月29日付『レ・ザナル』誌掲載の「仏蘭西（フランス）に於ける第一印象」は晶子が一般のフランス女性について若干の知識を得た後に書き直された、或いは手が加えられた、いわば第2稿目という未知の事情がファローの証言よ

り明かとなった。

十、幻の第一原稿の内容を知る手掛かり

晶子による『レ・ザナル』誌掲載文の知らざれる経緯が詳らかになった一方、サルセイに叫び声を上げさせた初稿の内容を知ることは、その原稿が発見されでもしない限り困難と思われた。しかし、フランスの新聞を丹念に調査すると、『レ・ザナル』誌発売直前、晶子に関する記事の掲載が確認された。その内容を検証すると彼女が当初フランス女性に対してどのようなイメージを抱き、いかなる意見を述べたか凡その事情を窺い知る事が出来、図らずもファローの原稿内容に信憑性を与える結果となった。

十一、初めて外国雑誌の表紙を飾った日本の文芸人

離仏した晶子に寛が宛てた書簡（1912年10月15日付）に「新聞雑誌記者の中にもフワロオが尤も君の早く帰りしを惜み居り候。大新聞の『タン』にも又いつぞや一緒に行きし雑誌社の雑誌にも君の記事出で候。写真は甚だ不出来に候ひし」の一文が見える。[23]

新聞雑誌記者の「フワロオ」君は、レオン・ファロー。「いつぞや一緒に行きし雑誌社の雑誌」とは晶子が表紙を飾った『レ・ザナル』誌を指す。寛は写真の出来に不満の態である。しかし、特筆される点は、その出来如何に拘らず、晶子が日本の文芸人として外国雑誌の表紙を飾った、おそらく最初の例となったことであろう。

書簡にある「一緒に行きし雑誌社」＝レ・ザナル社は、当時パリ9区のサン・ジョルジュ通り51番地（51, Rue Saint Georges）に社屋を構えていた。メトロのサン・ジョルジュ駅から南に下る最初の道を折れる角で、現在はテアトル・サン・ジョルジュ（Théâtre Saint Georges）という劇場になっている。与謝野夫妻が滞在したヴィクトル・マセ通りのアパルトマンからは直線にして僅か300メートル程度。両者はメトロ一駅にも満たない至近の位置関係にあった。

十二、『ル・タン』紙　1912年9月12日号

寛の書簡を手掛かりに『ル・タン』紙に当たると9月12日号に「女流詩人与謝野晶子と日本の女性」[24]と題された晶子へのインタビュー記事が見つかった。記事を書いたのは、晶子の帰国を最も惜しんだというレオン・ファローである。

味噌汁や緑茶、酒、堺の町に敬意を表した様々な品が食卓に並んだ江内アトリエ内での昼食後、日本の女性について語るよう請われた晶子は往時と現在を比較しつつ、「新しい女」の先端を行く者としての矜恃と西洋人の目から見

た不正確な日本の姿への不満が滲む日本論を独白する。前近代的と認める日本の良妻賢母教育は西洋文明の影響を受け近代化され、より困難になった経済的状況から、日本の若い女性達は自ら生活していけるような手段を講じる教育を欲し、各分野で自立した働く女性が生まれた状況を述べる。又、近来の著しい身体的発達にも言及し、日本的な美徳を守りつつ日本女性の将来には何ら不安の無い事を力説する。

記事後半、ヨーロッパ、特にフランス女性について意見を求められた晶子は、まだ十分な知識がないと断りながらも独自のフランス女性観を忌憚なく披瀝した。以下その部分の拙訳を付す。

フランス女性についてはまだ十分な知識がなく、あなたにお話をする上で、彼女達について抱いた私の意見が誤っているのではないかとの危惧も抱きますが……。思うに彼女等は将来、女性がどのような役割を演じるかに思いが及ばないのでしょう。知識欲に乏しいようにも思われます。更に男性がそうであるような独立の心を養おうとすることには一層関心を払わぬようです。私の知るところの蝶々や小鳥達といったある種のパリジェンヌ等を進んで例えに引いてお話しするのですが……。彼女達が男性に隷属し玩具としてある限り、フランスの女性が現代的な女性であるとはいえないでしょう……。どれほどのフランス女性が英国の女性と同じくらい教養や教育によって解放されているのだろうかと自問しております……。[25]

日仏協会々員、日本贔屓であったファローも「しかし、『夢之華』、『恋衣』、『青海波』で知られる優美な女流詩人はまだフランス語を解さない。どうしてフランス女性を理解することが出来ようか?」と晶子のフランス女性観に婉曲な疑問を呈し記事を結ぶ。[26]

十三、『ル・プチ・パリジャン』紙　1912年9月16日号

『ル・タン』紙に記事が掲載された4日後、『ル・プチ・パリジャン』紙にポル・ジニスティ（Paul GINISTY）の署名入りで晶子のフランス女性観への反響ともいえる記事が載った。晶子の意見はフランス語の理解が浅い為、と比較的擁護の調子が見られたファローとは異なりジニスティは辛辣である。

晶子があらゆる話題に意見を持ち、どんな質問も拒むことなく、フランス到着から日が浅いにも拘わらず、「既に仏女性の評価を確立している」と痛烈に当て擦る。更に「この極東よりの観察者はパリジェンヌをして、現代的な思考を持たず、未解放で《男性に隷属》と非難する」、その不

当を告発する。[27]

ファローが晶子を「優美な女流詩人」“la gracieuse poétesse”と形容したのを逆手に、彼女がパリジェンヌを「蝶々や小鳥達」と例えたのはなんとも「優美」“gracieux”とフランス流のエスプリで鋭く切り返えす。[28]

欧州で芸者が日本女性の典型と見做なされていることに憤る晶子が、真の日本女性を語るのであれば、暫く日本人家庭の元で暮らし、よく観察することを提案したのと同様、ジニスティは晶子が正しいフランス女性観を語るのには更に長いフランス滞在が必要とも指摘する。彼が晶子を「この極東よりの観察者」（＊傍点筆者）“Cette observatrice, venue de l'Extrême-Orient”と呼んだのは『ル・タン』紙で晶子がヨーロッパ人に「真の日本女性を観察して欲しい」（＊傍点筆者）“Observez de vraies japonaises”と問うたことへの意趣返しである。

ある特定の日本女性のイメージを広くフランスに伝播したピエール・ロティの小説『お菊さん』[29]に晶子が懐疑的な微笑を浮かべたのに対し、「ヨーロッパ女性の生活について彼女が持つ意見もさして正確でなく、コミュニケーションの簡便、迅速さにも拘らず、現実から大きく逸脱するような習慣を各々背景に持つ民族が互いに理解し合いないのは誠に悲しむべきで、古い既成概念から自由になるほど難しいことは無いのだろうか」と嘆息する。[30]

十四、『レ・ザナル』誌に見られる書き直しの痕跡

『ル・タン』紙に晶子のインタビューが掲載され、その内容にジニスティが素早く異を唱えたことを知れば、サルセイが驚愕し、掲載を見送った『レ・ザナル』誌、幻の初稿の内容も自ずと推測される。

晶子はその速筆に任せ、おそらく『ル・タン』紙上に開陳したと同様、「知識欲に乏しく」、「独立心に欠け」、「蝶々や小鳥達のように男性に隷属し玩具となっている」といった語でフランス女性を厳しく評し、教養豊かな知識人イヴォンヌ・サルセイを仰天させたろう。

『レ・ザナル』誌の晶子掲載文がサルセイの拒否にあった後、手を加えられた第2稿目という事情を知った上、『ル・タン』紙インタビューと比べ再読すると隠れていた経緯が浮かび上がってくる。

私がピガール広場の近くに居を定めたのは全くの偶然でした。当時、モンマルトルが「遊楽好き」の人々の集う夜の街であることに無知でした。それを知ったのはそこに居を構え3日後のことでした。

偶然が私をモンマルトルへと導き、そこで一つの範疇の、身づくろいや装飾品などにしか興味のない女性を

「目撃」しました。私がこの「嘘の天使達」を真のフランス女性と見做さぬことは言うに及ばないでしょう。[31]

パリ到着以前、「モンマルトルが『遊楽好き』の人々の集う夜の街であることに無知」であったとは、初稿で見誤った観察の正当化と見え、「この『嘘の天使達』を真のフランス女性と見做さぬことは言うに及ばない」（＊傍点筆者）と敢えて反語で強調する所は、サルセイを驚かせたフランス女性観の修正痕と読める。

私は商人や労働者、農民など市井の婦人達を出来る限りの注意を払って観察しました。彼女達は貞淑で誠実、勤勉、両親に忠実であり、また彼女達がどれほど夫に尽くそうとしているかをも認めました。彼女達への教育は余り行き届いておりませんから、時に過ちを犯すこともあるでしょう。しかし、概して彼女達は野に咲く野生の花のようであります。従順で、我慢強くそして日本の女性と同様、女性のなすべき仕事に対して非常に忠実です。[32]

「市井の婦人達」に限定されるが「商人」「労働者」「農民」といった異なる職種の女性を「出来る限りの注意を払って観察」の言は、実際どの程度サルセイの介入があったか詳細は不明だが、「イヴォンヌ小母さんがこの日本女性の手を取り、真のフランス婦人の生活を観察、理解できるよう彼女をあらゆる階層に連れ出した」（＊傍点筆者）というファローの証言と概ね一致する。[33]

晶子が記事の冒頭を「ブルジョワ家庭の生活をまだ窺い知る機会がない」[34]と書き起こしていることも「市井の婦人達」との対比で注目される。又、自身の観察が一面に於いて真実とも自負する晶子は、フランスの女性達が「時に過ちを犯す」と売春行為の存在を暗示しつつ、その原因を女性が男性に比べ教育を受ける機会が限定される社会構造上の問題に帰し、各自の個性については「野に咲く野生の花のよう」に「従順で、我慢強くそして日本女性と同様、女性のなすべき仕事に対して非常に忠実」と優しいまなざしを送り、一定の評価を与えている。

『ル・タン』紙上で開陳したフランス女性への厳しい指摘と比較し、その調子は明らかに和らぎ、より注意深く公正な視線を保つよう努めたとみえる。

こうした変遷から、サルセイの初稿却下を受け、自身の観察が一面的であったことを自覚した晶子は続く第2稿に一層の注意を払った痕跡が読み取れる。

十五、『レ・ザナル』誌改稿の経緯から窺える晶子の創作に於ける一傾向

1901年『みだれ髪』での文壇デビュー以来、自身の

創作活動から新聞、雑誌に投稿される膨大な歌の選歌、子供の養育、雑事に至るまで一家の大黒柱的役を一手に担い、「自分の手に一日でも筆の持たれない日があらうとは想像もしなかつた」[35]晶子にとって、仕事の依頼に迅速に応じることは必然の要求であった。サルセイの原稿依頼に晶子が驚くべき速さで応えたというファローの証言は、時間的余裕のあったパリに於いても、晶子の習慣が不変であったことを示している。

主観的な感情を表出する詩歌等の創作に於いて、直感に従う晶子の迅速な創作態度はその希有な才能として有利に働いた。しかし、客観性を保ち、論理的に論を進める評論のような分野に於いて、その直感に拠る所の大きい彼女の主張は、時にやや主観に偏り拙速に失したケースも散見される。

例えば後年、平塚らいてう等との間に起こった「母性保護論争」[36]を挙げれば、らいてうが傾倒し、その著作を翻訳していたエレン・ケイに精通しないまま持論を展開、らいてうの批判に晒された事が発端となっている。

一連の論争の中で、雑誌『太陽』（１９１８年11月号）に寄せた「平塚・山川・山田三女史に答ふ」には「私は母性の国家的保護に対し多く直感的に不可として来た」（＊傍点筆者）とあり、晶子には意識的に自らの「直感」を切り口に論を構築する傾向がみえる。

前出、「巴里に於ける第一印象」には「自分の直覚を以て間違いなしとすれば」（＊傍点筆者）という仮定に基づき、フランスの男性が東洋の男性と同様、その内心では女性を従属物、玩具、厄介者視しているとも指摘する。

更に一例を引けば、第一次世界大戦後、１９１９年パリ講和会議の際、日本が提案した人種差別撤廃案に関し、晶子は「巴里の国際連盟会議へ日本政府の提出した人種差別撤廃案を最初から余計な提案だと直感して、少しも之に対して気乗り」しなかったことを告白している。[37]（＊傍点筆者）

英仏女性の比較に於いて「晶子の観察は、ある意味では正鵠を射っている。ただその裏付けのない直感力に頼るものであるところが弱い」と指摘したのは歌人の松平盟子である。[38]

晶子の基本的創作態度の一傾向として、入念な下準備を重ね一歩踏み出す慎重さより、むしろ鋭い「直感」を頼りに大胆に前進しつつ、必要に応じ漸次学習していく性向が窺える。そうした傾向は、不正確な観察により原稿の書き直しを迫られたパリでの苦い経験を経た後も、続いた形跡が認められる。

仮に、晶子の「直感」「直覚」が無意識よりの表出であったなら、或いは、無邪気な放言として、フランス女性については「十分な知識がない」と予防線を張ることも許容されたかもしれない。しかし、それらは明らかに意識され、筆先の武器となっている以上、自らの「直感」「直覚」を裏付ける、論拠が示されなければ自説に生ずる責任を半ば

放擲したと見做されても止むを得ない。

フランスの印象を未だ作品に反映させる準備が整わない状態を晶子は自ら「最良の状態で雛を孵そうと卵を抱える雌鶏のような状況」[39]と例えた。しかし、『レ・ザナル』誌改稿の経緯から、フランス女性の印象については、卵を十分に温めきらぬまま、未熟の雛を孵す如くの失態を演じたといえよう。

十六、まとめにかえて

晶子は、概してその容姿の美しさと美的感覚に於いて、他のヨーロッパ女性と比しフランス女性に最上級の評価を与えた。一方、男性への依存度、自立の意識に対しては手厳しく、パリの女性を両極に評価した。

いずれも晶子がパリで観察したフランス女性の一面を感覚的に鋭く捉えた評価である。しかし、惜しむらくは、その両極のバランスの上に成り立つパリという特異な街に生活する人々とその深層社会構造をよく理解し、整理考察する時間と精神的余裕に欠けた憾みがある。更に言えば、その視点は東洋からの一観察者としての鋭い一瞥に留まり、フランスの生活を全身で受け止め咀嚼し、血肉として昇華させるまでには至っていない。

結果、『レ・ザナル』誌への初稿は却下、『ル・タン』紙で晶子が述べたヨーロッパ人の目から見た日本女性への憤懣は、ジニスティによって恰も鏡写しの如く晶子に跳ね返ってきた。

晶子以前、ヨーロッパの地を踏んだ夏目漱石や高村光太郎が、異国で鏡に映った自らの姿に愕然としたことはよく知られている。しかし、ヨーロッパ女性の中に伍し、晶子にそうした自己の容姿に対する極端な劣等意識は見られない。和装に庇の大きな流行の西洋帽を合わせ恬然と異国の街を歩く姿は、森鷗外が「何事にも人眞似をしない。個人性がいつも確かに認められる」と評した通りであった。[10]

但し、漱石や光太郎が鏡に映った自己の姿に東洋の小国の劣等意識を投影させていた点は晶子に於いても少なからず同様であった。洋行の先輩男性陣が委縮し内向的な性質を示したのと異なり晶子はパリにあって、矮小化された旧来の日本女性のイメージを払拭すべく、日本女性の名誉を守る論を臆せず堂々と語った点は、やや力みの見られることを差し引いても大いに評価されてよい。その力みは、丁度夫、寛がロダンを前に「話の中にうつかり日本人を代表して居る気」に成り、「力めて威勢の好い応答をして仕舞つた」[11]のと同質の高揚感に起因しよう。

ヨーロッパという鏡を通じ晶子が見たもの、それは、将来かくあるべきと望む日本女性の姿、引いては普遍的価値をもつ理想の女性像であった。それは、同時に、女性の地位向上と経済的自立、更に男性と同等の権利を希求し、文筆を以てその前進に寄与しようと実践する自己の投影でも

あった。

短くも濃厚であったフランス滞在が触媒となり、晶子がフランス女性の中にある二極性を見たように、離仏以降、彼女自身の中にもある二極化の進行が観察される。一極は、男女が互いの長所を発揮、補完しつつ、女性が男性と同等の権利を得る理想の姿を将来に希求する社会評論家としての貌。他極は、西洋文化の刺激を受ける中で、日本の文化伝統を再発見し、歌道の更なる追究、及び日本が誇る『源氏物語』を筆頭に『栄華物語』、『徒然草』等の現代語訳に象徴される古典回帰への文学的傾向である。

明治の終焉と大正の幕開けという時代の区切りをヨーロッパで迎えたこの時期の晶子の中に、未来の女性への理想像と過去の古典文学の中に見える変わらぬ伝統美への憧憬といった、相反する二方向のベクトルが急速に拡大していったと見ることが出来る。

注

（1）与謝野寛・晶子共著『巴里より』（金尾文淵堂　1914年5月3日）

（2）菅沼宗四郎著『鉄幹と晶子』（中央公論社出版　1958年11月3日）＊晶子フランス滞在時の姓名は石引宗四郎

（3）筆者拙訳。以下原文。“Ce journal profitera de toutes les améliorations connues dans la presse moderne illustrée. Son succès est dès aujourd'hui assuré”

（4）注（1）前掲書所収「杜鵑亭（とけんてい）」より、「ブッティイ・パリジャンの記者のファロウさん」

（5）本名、マドレーヌ＝イヴォンヌ・ブリッソン（Madeleine-Yvonne Brisson）。イヴォンヌ小母さん（Cousine Yvonne）の愛称でも呼ばれた。父は著名な劇評家フランシスク・サルセイ（Francisque Sarcey）。夫は『レ・ザナル』誌創刊者ジュル・ブリッソン（Jules Brisson）の息、アドルフ・ブリッソン（Adolphe Brisson）。

（6）『レ・ザナル』誌 “Les Annales Politiques et Littéraires” 1912年9月29日　1527号　筆者拙訳。以下原文。“Un jeune peintre japonais de grand talent” “M. Yeutchi Shuncho, véritable Steinlen japonais”

（7）エドワール・ゴーチエ著『「日本の誉れ」オデオン座での成功』《“L'HONNEUR JAPONAIS” Succès d'Odéon par M. Edouard GAUTHIER》『日仏協会会報』1913年7月30号　抜粋。Bulletin de la Société Franco-Japonaise de Paris. Extrait du bulletin No 30 Juillet 1913 Paris Bibliothèque de la société 59, Avenue du Bois-de-Boulogne (musée d'Ennery).
注（1）前掲書の中にこの劇について触れた章「日本の誉れ」、「五月一日」があり和田垣謙三、徳永柳洲等日本人が演出のアドバイスを与えている。

（8）『日仏協会会報』1913年10月～1914年1月31・32合併号。レオン・ファロー著「サロン・ドートンヌの江内春潮」。Bulletin de la Société Franco-Japonaise de Paris. Octobre

1913.Janvier 1914 No 31-32. “Yeutchi Shuncho au Salon d’Automne” par M. Léon FARAUT
以下原文 “D’une façon générale, les critiques ont eu pour l’œuvre de Yeutchi Shuncho les appréciations les plus élogieuses”「一概に、批評家は江内春潮の作品に対し、最も賞賛に値する評価を与えた。」筆者拙訳。

（9）『コメディア』紙の記事は、岡倉が国立美術学校の優等生に限り3年間無償で門戸を開いていた彼の名を冠す少人数の私塾に江内が通ったと記す。江内が東京に出たのは京都市立美術工芸学校を修了した1906年以降。1898年既に東京美術学校を辞していた天心岡倉覚三は、賛同する美術家達と「日本美術院」を結成していたが、1906年以降、前年に完成した茨城の五浦海岸に立てた別荘六角堂に「日本美術院」を移していた。従って、江内は東京の美術学校と茨城の六角堂を往復していたという事であろうか。

（10）注（7）前掲書。「日本の誉れ」“L’honneur Japonais” の記事に挿絵を提供した際、1時間も掛からず20枚のデッサンを書き上げ周囲を驚かせたとの記述あり。以下原文。“Yeutchi Shunshô, qui n’est pas un inconnu pour nous, a semé l’article de ces ravissantes improvisations dont en une autre circonstance nous l’avons vu couvrir, en moins d’une heure, vingt feuilles de papier à la grande surprise et à la grande joie de tous.”「見事な即興画を記事に散りばめた江内春潮は、我々にとって未知の人物ではなく、別な機会に彼が1時間足らずで20枚もの絵を描くのを目撃したのは、我ら全ての大きな驚き、又喜びとするところであった。」筆者拙訳。

（11）注（8）前掲書。江内がヨーロッパ流の絵画でソウルの王宮の他、美術館の装飾も手掛けたとの記述あり。以下原文。“il a décoré le Palais impérial et le Musée de Séoul. En faisant de la peinture《européenne》”《ヨーロッパ風》絵画とは油彩画を指すと思われる。

（12）『コメディア』紙 “Comœdia” 1911年7月21日付 13 90号 以下原文。“ni le lycée de Kioto, ni celui de Tokio ne réussirent à lui faire prendre goût aux chiffres.”「京都、東京の学校共に江内が数字への興味を抱くことはなかった。」筆者拙訳。「数字への興味」とは江内の父が彼に数学者若しくは、技術者になって欲しいと希望していたことによる。

（13）松井莱摘「画学生と動物園―京都市立美術工芸学校卒業作品について―」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報』27号、2018年3月31日）

（14）レオン・ファロー（Léon FARAUT）著 1950年の未発表原稿 “COMMENT YVONNE SARCEY SAUVA LA REPUTATION DE LA FEMME FRANCAISE AUX YEUX DES JAPONAIS” 以下原文。“Yeutchi Shuncho, un remarquable peintre du Japon qui, depuis quelques mois, avait établi sa résidence rue Girardon, sur le haut de la Butte”「日本よりの傑出した画家、江内春潮は、数か月前より、丘の上のギラルドン通りに居を定めていた。」筆者拙訳。

(15) 注（12）前掲紙。筆者拙訳。以下原文“un atelier perché tout en haut de la rue Lepic”

(16) 『日仏協会会報』１９１１年３月21号 Bulletin de la Société Franco-Japonaise de Paris. Mars 1911 No 21. “YEOUTCHI (Suncho) Prof. à l'Ecole des Beaux-Arts, Tokio. 55, Rue Lepic.” 記載された記号（A）から江内が年単位の登録者で１９１１年度の日仏協会会員であったことが分かる。

(17) 注（14）前掲未発表原稿。写真14参照。

(18) 『ル・フィガロ』紙“Le Figaro”１９５０年４月20日　１７４５号 Pierre Brisson.　筆者拙訳。以下原文。写真19参照。“J'exprime ici au nom des miens, à tous les amis, lecteurs, confrères de Paris, de province, et de l'étranger, qui, en si grand nombre, et avec tant de chaleur, ont manifesté leurs regrets de la mort d'Yvonne Sarcey et leur estime à sa mémoire, notre émotion profonde et notre reconnaissance. P.B.”

(19) 注（14）前掲未発表原稿に拠れば、与謝野夫妻が居住したのはフロショ通り（Rue Frochot）とある。しかし、その正確な住所がヴィクトル・マセ通り21番地の２（21, Bis Rue Victor Massé）であることは、神野藤昭夫の論「晶子・源氏・パリ」『国文学研究』第１８２集　２０１７年６月）があり、拙稿「１９１２年　パリ　与謝野寛・晶子の正しい住居」（『日本文學誌要』第１０１号　２０２０年３月）でも詳しく明らかにした。また、寛がモンマルトルに居を構えたのは晶子のパリ到着（１９１２年５月19日＊筆者注）１週間前とも記されるが、その正確な日付は、寛が晶子に宛てた書簡に明記された１９１２年１月26日である。（与謝野寛、晶子著／逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成　第一巻』八木書店　２００２年10月）

(20) 注（14）前掲未発表原稿。以下原文。“elle demanda à Mme Yossano de rédiger un article dans lequel elle noterait ses impressions sur la femme française. Oh, cet article! Avec quelle rapidité la poétesse le rédigeal”「彼女（＝イヴォンヌ・サルセイ）は与謝野女史にフランス女性の印象について気付いたことを記事にするよう依頼した。嗚呼、この記事を！、何という迅速さで女流詩人は書き上げたことか！」筆者拙訳。

(21) 注（14）前掲未発表原稿。筆者拙訳。以下原文。“Elle affirmait sérieusement qu'il n'en allait pas de même dans son pays où les femmes savaient un sens plus strict de la fidélité”

(22) 注（14）前掲未発表原稿。筆者拙訳。以下原文。“Mais où donc Mme Yossano a-t-elle rencontré de telles Françaises?”

(23) 注（19）前掲書。

(24) 『ル・タン』紙“Le Temps”１９１２年９月12日　１８６９８号　筆者拙訳。以下原文。“La poétesse Akico Yossano et la femme japonaise.” Léon Faraut.

(25) 注（24）前掲紙。筆者拙訳。以下原文。“《Je ne connais pas suffisamment la Française et j'ai bien peur de me tromper en vous disant l'opinion que je me suis formée d'elle... Il me semble qu'elle n'a pas la conception du rôle que la femme

sera appelée à jouer dans l'avenir. Elle cherche peu à s'instruire. Elle cherche moins encore à conquérir son indépendance comme l'homme. Je comparerais volontiers quelques Parisiennes de ma connaissance à des papillons ou à des petits oiseaux... Tant qu'elle est l'esclave et le jouet de l'homme, on ne pourrait dire que la Française est une femme moderne... je me demande si le nombre des Françaises émancipées par l'instruction et l'éducation est aussi grand que celui des Anglaises.....》"

(26) 注（24）前掲紙。筆者拙訳。以下原文 "Mais la gracieuse poétesse des *Fleurs de rêves*, de la *Robe d'amour* et des *Vagues de l'Océan*, ne parle pas encore le français. Comment comprendrait-elle la Française? "

(27) 『ル・プチ・パリジャン』紙 "Le Petit Parisien" 1912年9月16日 13106号 筆者拙訳。以下原文。"Cette observatrice, venue de l'Extrême-Orient, leur reproche de n'avoir pas des conceptions modernes, de n'être pas émancipées et d'être《les esclaves de l'homme》"

(28) 注（27）前掲紙。筆者拙訳。以下原文。"ce qui est gracieux, d'ailleurs——elle en est encore à comparer les Parisiennes《à des papillons ou à des petits oiseaux》"

(29) Pierre LOTI "Madame Chrysanthème" 1888 Calmann—Lévy

(30) 注（27）前掲紙。筆者拙訳。以下原文。"Il ne paraît pas qu'elle ait des notions beaucoup plus exactes sur la vie féminine occidentale. Ainsi, en dépit des facilités et des rapidités de communications, les peuples ont-ils bien de la peine à ne pas vivre sur un fond réciproque de traditions, s'écartant fort de la vérité. Est-il donc rien de plus malaisé que de renoncer aux vieilles idées reçues? "

(31) 注（6）前掲誌。"Premières impressions sur la France" Akico Yossano（「仏蘭西（フランス）に於ける第一印象」与謝野晶子）筆者拙訳。以下原文。"C'est tout à fait par hasard que j'ai établi ma résidence près de la place Pigalle. J'ignorais alors que Montmartre était fréquenté, la nuit, par un peuple de《fêtards》. Je n'appris cela que trois jours après mon installation.

Le hasard qui m'a conduite sur la Butte m'a permis de《voir》la femme d'une certaine classe, celle qui ne s'intéresse qu'aux choses de la toilette et aux frivolités. Il va sans dire que je ne considère pas ces《anges du mensonge》comme de vraies Françaises."

＊内山秀雄・香内信子 編集・解題『與謝野晶子評論著作集 第十七巻』（龍渓書舎 2002年11月20日）に「仏蘭西の第一印象」として原文に忠実な瀧口明子訳があるが、今回の対訳には拙訳を供す。

(32) 注（31）に同じ。筆者拙訳。以下原文。"J'ai observé de mon mieux quelques femmes du peuple : des commerçantes, des ouvrières, des paysannes. Et j'ai constaté combien elles sont

fidèles, probes, appliquées, soumises à leurs parents et combien, aussi, elles sont prêtes à se sacrifier à leurs maris. Leur instruction, peu étendue, leur fait parfois commettre le péché. Mais, en général, elles sont comme les fleurs sauvages des plaines. Je les vois dociles, patientes et très fidèles à leurs devoirs, ainsi que les Japonaises.”

(33) 注（14）前掲未発表原稿。筆者拙訳。以下原文。“Cousine Yvonne prit donc par la main la Japonaise et la conduisit dans tous les milieux où Mme Yossano put voir et comprendre la vie réelle de nos compatriotes”

(34) 注（31）に同じ。筆者拙訳。以下原文 “je n’ai pas eu encore l’occasion de vivre au milieu d’une famille bourgeoise.”

(35) 注（1）前掲誌。

(36) 「母性保護論争」は、1918年〜1919年に掛け、働く女性と育児について主に晶子と平塚らいてうの間に起こった論争。らいてうの指摘に対し、論争前段階で晶子はエレン・ケイの主張を一面的に見過ぎていた点を認めている。「一人の女の手帳」（『太陽』1916年6月号）

(37) 「自ら責めよ」（『横浜貿易新報』1919年4月27日）

(38) 松平盟子「晶子のパリ一九一二年」（『短歌研究』短歌研究社2001年4月号）

(39) 注（31）に同じ。筆者拙訳。以下原文。“Je suis dans la situation d’une poule couveuse qui s’efforce de faire éclore ses poussins dans les meilleurs conditions.”

(40) 森鷗外著「與謝野晶子さんに就いて」（『中央公論』1912年6月）

(41) 注（1）前掲書。

付記

＊掲載写真（1〜19）は全て筆者所有。

＊フランス語の文献については、注（7）、注（12）、注（16）、注（24）、注（27）、及び『ドゥマン』誌1913年4月10日号、『ル・ラディカル』紙1913年4月16日号、『ラントランシジャン』紙1913年11月30日号は、Gallica, la bibliothèque numérique de la Bibliothèque de France 参照。

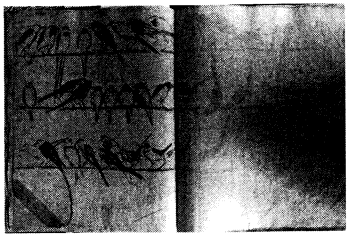
他は筆者所有を参照。

追記

＊本文、第八節「モンマルトルの日本人画家、江内春潮」に関連し、オ・ラパン・アジル（Au Lapin Agile）の所有者、イヴ・マチュー（Yves Mathieu）氏のご厚意で来店記念帖（Livre de Bord）を実見、1913年11月30日付（1219号）ラントランシジャン紙に記載される江内によるデッサン3点（①：横並びになって、盛んに囀る鳥達、“des oiseaux, toute une alignée d’oisillons babillards, remuants”②：髑髏の上で象徴的なケークウォークを踊る兎、“un lapin dansant un cake-walk symbolique sur des ossements humains”③：モンマルトルの子供達、“des grosses de la Butte”）、他1点、④：朱印のある猫の水彩画の合計4点を確認した。①と

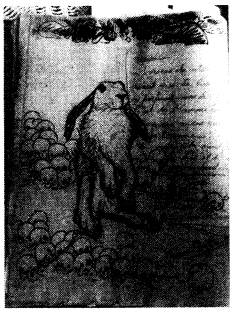
④には1911年12月4日の日付があり、1913年江内のサロン・ドートンヌ入選以前に描かれたもので、Monsieur Rue Girardon Japonais Montmartrois（ジラルドン通りのムッシュ、モンマルトルの日本人）のサインが認められる。②、③にも「ジラルドン通りのムッシュ」と読めるサインがあり、レオン・ファローの未発表原稿に記されたように江内はジラルドン通りに居住していたことが分かった。

①



①a

②



③

④

＊写真①、①a、②、③、④の5点はAu Lapin Agile所有。Yves Mathieu氏の許可を得て掲載。

（きくち　えいじ・一九九四年度卒）